

【短日】

日短（ひみじか）

短日は冬至のころ極限になる。古代、冬至を年の始まりとした。その名残で、今でも冬至は暦の基準とされ、太陰太陽暦では、冬至を含む月を十一月とする。一九年に一度、冬至の日が太陰太陽暦の十一月一日となることがある。これを朔旦冬至と呼ぶ。次は二〇一四年がその年にあたる。

冬至には日の出と日の入りが最も南寄りになるが、日本では日の出が最も遅い日は冬至の半月後の頃、日の入りが最も早い日は冬至の半月前の頃である。

植物には、日照時間が一定時間より短くなると花芽を形成するという性質の短日植物、逆の長日植物、昼の長さとは無関係の中生植物がある。短日植物の菊、秋桜、稲、朝顔などが秋の季語になっている。このような昼の長さの変化に応じた生物の性質を光周性と呼び、この性質があることよって、これらの季語が成立しているとも言える。

下五に日短の季語を置くと、「ひみ」と伸ばして読む。芽（目）や葉（齒）や実（身）も京都では二音に伸ばして読む。耳や鼻とともに基本の二音になり、頭や体などの三音、それらを足した五音、さらに二を足して七音というように、日本語のリズムが五と七でできあがっているのではないかと考えることができる。